

日本におけるプジョーのネームバリューを一気に高めた名車が 名門エレールから新金型キットとして登場

1980年代を自動車好きとして過ごした方ならば、外車に興味が無くとも、ゴルフGTIと並ぶ欧州製ホットハッチの双壁として知られるプジョー205GTIの姿カタチを想像することは容易だろう。同車をきっかけにフランス車に開眼したというエンスーも少なくないはずで、イタフラ(イタリア車/フランス車)をメインとする本誌の姉妹誌である『ティーポ』が創刊したのもちょうど205GTIがもてはやされていた1989年のことだ。そんな日本人にとっても懐かしい205GTIが40余年の時を経て、フランスのエレールから1/24スケールの新金型キットとして登場する。同製品はプラッツからリリース予定だが、今回はエレールをマネジメントするドイツのGlow 2Bから直接サンプルの提供を受けたので、古くから熱心なティーポ読者でもあった吉田史洋氏に同車にまつわる思い出と共に、製作レポートをお願いした。

HELLER [エレール] キット提供: Glow 2B (<https://glow2b.de/>) Special thanks to Keisuke TODA

小学生の頃、母親がレストランのパートとして働いていた。その店のオーナーはかなりのクルマ好きで店の裏にはカマロやトランザムが置いてあったのを覚えている。1980年頃だったと思う。そのレストランの新入りシェフがマコちゃん(誠さん)だった。

やがてマコちゃんはこういった経緯だったかは知る由もないが我が家の隣に越してきた。当時おそらく20代前半のマコちゃんは小学校高学年の僕を弟の様に可愛がってくれた。部屋に招いてたくさん並べたバイクのプラモを自慢げに見せてくれ、休みの日には愛車RZ250の後ろに乗せてくれたりした。その後、僕が中学2年に上がるタイ

ミングで我が家は引っ越し事となり、母親もレストランを辞めたのだがクルマ好きのオーナーやマコちゃんとは度々交流があった。

そんなマコちゃんはクルマ好きのレストランオーナーの影響もあったのかプジョー205GTIの中古車を購入した。白の1.9、左ハンドル、爽やかでイケメンのマコちゃんに凄く似合っていた。

僕は中学生の頃に作ったタミヤのプジョー205T16の影響もあり、そのベースとなった205GTIも同様に好きなクルマの代表格としてカウントしていたからマコちゃんが205GTIを選んだ事が自分の事のように嬉しかった。

それから程なくしてマコちゃんは突然レスト

ランを辞めた。結局205GTIには乗せてもらうチャンスが無いままだった。最後にうちの両親にも地元を離れる事を伝えに来てくれたのだが、夕刻の薄暗がりの中、2階の窓から見下ろした白い205GTIが走り去る時の乾いた排気音は今でも覚えている。

Hellerのプジョー205GTIが発表になった時、そんな思い出もあり、絶対に白で作りたいと思っていたのが実現した。キットはエンジンや足回りもしっかり再現されるフルディスプレイキットとなる。フロントグリル周辺はヘッドライトパーツの固定やバンパー、モール、グリルの



PEUGEOT 205 GTI

プジョー 205 GTI ©エレール1/24 ©作例製作: 吉田史洋

分割も絶妙で非常に雰囲気良く仕上がる。クルマの顔は命である。

また注目すべきは特に後部座席部分の内装パネルの再現であろうか。リアウィンドウ越しに内装が見えるのを考慮して後部座席のシートベルトまでモールドされている。

だがしかし、リアウィンドウに貼る熱線のデカールが透明度を損なわせてしまうのが玉に瑕となる。残念ながらリアウィンドウ以外のデカールの品質もあまり高くない。薄くて柔らかく、凸凹には

馴染ませやすいのだが、コシがなく破れやすくシワも発生しやすい。貼るべき場所にデカールを乗せてからの位置調整も非常にシビアだ。また元々の表面にある保護層が弱く、ちょっと爪が当たった程度で剥げてくるのにも手を焼いた。クリアコーティングも考えたが、結果が読めず今回はそのままにしてある。

ドアの開閉は最後まで悩むところで、今回は作例ということもあり、両面テープで仮留めしたが、次にプライベートで作るならがっちり固定したい。

完成するとごちんまりとしていながらその割に手のひらに心地良い重量感もある。キットの密度感、再現度のバランスが非常に高く、完成時の達成感、満足度も高い。誰が組んでも同じ仕上がりにはならないかもしれないが、その分適度にモデラーのスキルが試されるハードルが残されているのも組んでいて楽しくなる。

僕には前述の思い出補正も相まってここ数年で一番楽しいキットであった。(吉田史洋)

エレールよ！この流れで名フランス車をどんどん出しておくれ！



1965年に発表した204を皮切りに、FFの小型車を多数リリースしたプジョー。205は1983年に発売されたが、ピニンファリーナの手掛けたエクステリアと、洗練された走りで世界的なヒット作となった。GTIは1984年に追加されたホットバージョンで当初は1.6リッターエンジンを搭載したが、1989年にはエレールがモチーフにした1.9リッター仕様も登場している。1トン切る軽量な車体と1.9リッターエンジンとの組み合わせで最高速度は200km/hに達した。1/24プラモデルはタミヤとエレールがグループB規格のラリー用ホモロゲ車、205ターボ16をキット化しているが、ロードカー版(といっても205ターボ16とは別物だが)は史上初となる。

日本のキットに慣れた目には新鮮に映る独特のパーツ構成と焦点の当て方に注目



ボディは塗り分けが面倒な、モールドはすべて別パーツ化されている。エンジンフードとドアはボディとは別成形となるが、ヒンジ機構は持たないので、開閉アクションを実現させるためにはヒンジの自作が必要。ウィンドウ類は外嵌め式で窓枠はウィンドウ側にモールドされている。



パーツ点数を抑えつつ、内装およびシャシー、エンジンの再現性は極めて高い。インパネは左右選択式。内装の内張りもCピラー裏側まで細密な表現がなされる。エンジンはブロック自体から組み上げるリアルなもの。補器類や一部配管もモールドされており、プラグコードを追加すれば1/24モデルとしては文句なしといった解像度を見せる。デカールには何とクルマの年式にあった「品川ナンバー」も含まれている。ホテルのドアノブサインをパロットオマケも楽しい。

面倒なマスキング作業無しにこの年代のフランス車らしい樹脂パーツの塗装が可能



実車では早い段階から油気が抜けて、よくも悪くもフランス車的な味わいを見せる未塗装の樹脂製パーツ類。ボディ全周を取り囲むプロテクターもモールドに加え、フェンダーフレア部も別パーツ化されているのが嬉しい。車高やトレッドもキットをストレートに組んでいるが抜群の佇まいに仕上がる。デカールは印刷こそ鮮明だが、日本製品に比較すると破断しやすく、貼り付けにあたっては注意が必要だ。

同キットの魅力のひとつとして適度な解像度の室内および機関係再現を挙げたい



そこそこのパーツ点数があるが、嵌合精度も高く、密度感のある仕上がりが楽しめるエンジンコンパートメントは同キットの長所のひとつ。作例ではプラグコードを追加している。ドアは開閉式ではなく開/閉状態のどちらかを選ぶ方式だが、何かツメなどで固定できるわけではないので、ヒンジを自作するか、あるいはボディにドアを接着するか、磁石などで着脱式とするか、といった工夫が必要になる。内装はシートベルトアンカーを追加した以外は素組み。シート生地はデカールが付属するが、こちらもソフターなどの相性が悪いので、貼り付けには細心の注意が必要となる。赤のカーペット類はファクトリーストック状態だが、実にフランスのスポーツモデルらしいディテールだ。Cピラー内側の内装トリムの表現も実に饒舌だ。



工作のツボ

国産の最新キットに慣れていると
それなりに手はかかるがそれもまた楽し



①ボディは全体的にヒケやウネリが多め。裏側のモールドの影響を受けているようだ。②エンジンフードもヒケ、ウネリ多し。捨てサフを吹いて確認しながら面を研ぎだす。③フェンダー上部もヒケがありドアからの面がイマイチ揃わないので溶きパテを塗る。④研ぎ出してヒケを埋めた。

⑤窓枠の塗装をしたウィンドウパーツを嵌めると黒セラより内部にボディの一部が見えてしまう。⑥ボディのウィンドウ受けの部分を細く削り込んで対処した。⑦リアリアサイド同様に下端部分のウィンドウ受けの部分が見えてしまう。⑧受け部分をギリギリまで削って見えないように加工した。⑨フロントウィンドウはボディにいまひとつフィットしないため、マスキングテープでしっかり仮固定し、内側からハイグレイド模型用セメダインをコーキングの要領で注入して接着した。⑩フロントグリルの塗装。ラッカー塗料でフィン部分はボディカラー、エンブレムはざっくりシルバーで塗装した後、クリアコートまで済ませる。⑪まずグリル全体をエナメルセミグロスブラックで塗装し、エナメル溶剤を染み込ませた綿棒で表面の塗料を拭い取れば完成。⑫サイドモールやバンパーの赤いラインはデカールが用意されているが、貼るのが難しいのでこちらもハセガワの曲面追従シートで代用した。

誰が組んでも同じ仕上がりにはならないかもしれないが、
その分モデラーのスキルが試されるハードルが残されている

PEUGEOT 205 GTI

